

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



チームの作戦によって勝敗の行方は未知数（大槌町ソフトバレーボール協会）

## 特集

# スポーツがつなく 地域コミュニティ

- 青空の下、ペタンクがつなく住民の生活と心 ③  
清水ペタンク愛好会（宮城県女川町）
- 多世代がともに汗を流して、気かけ合う ⑤  
大槌町ソフトバレーボール協会（岩手県大槌町）
- 練習場は会話と笑顔が絶えない「野外のサロン」 ⑦  
五十鈴グラウンド・ゴルフクラブ（福島県郡山市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント  
（東北大学大学院 歯学研究科 副研究科長 小坂健さん）

### まじわる災害公営住宅① ⑨

あすと長町復興公営住宅（宮城県仙台市太白区）

### まちの仕組み④ ⑩

県庁所在地として、震災避難者の生活環境を整備（岩手県盛岡市）

### 私の地域の元気興し「S-1 グランプリ 第2回いがす大賞」⑦ ⑫

株式会社 小野花匠園（宮城県南三陸町）

### 東北の元気⑭ ⑬

アグリードなるせ（宮城県東松島市）

### ともに生きるためのヒント① ⑭

大友愛美さん（特定非営利活動法人ノーマライゼーションサポートセンター こころりんく東川 副理事長／北海道東川町共生サロン ここりん・相談センターここりん 運営者／ソーシャルワーカー）

### 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

### 暮らしを支える支援員⑯ ⑯

仮設住宅と災害公営住宅をつなぐネットワーク会議  
塩釜市社会福祉協議会（宮城県塩釜市）

特集

# スポーツがつなぐ/ 地域コミュニティ

あなたの好きなスポーツは何ですか？

ひとことにスポーツと言っても、たくさんの種類があつて、  
どのようなものを好むかは、人それぞれ。

ただ趣味として、または健康のため、  
友だちと、もしくは、初めて出会う人たちと。

毎日活動していたり、不定期に活動したり、  
目的や目標、取り組み方も、人によってさまざまですね。

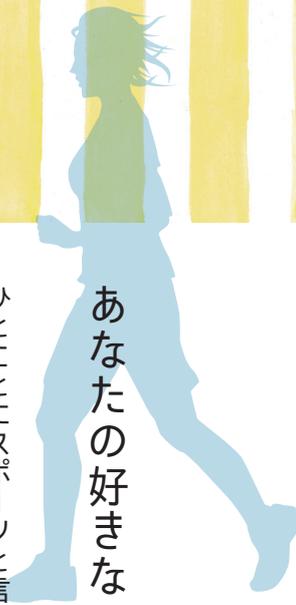
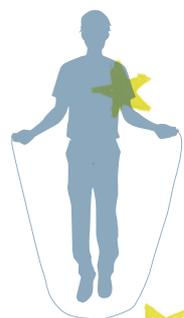
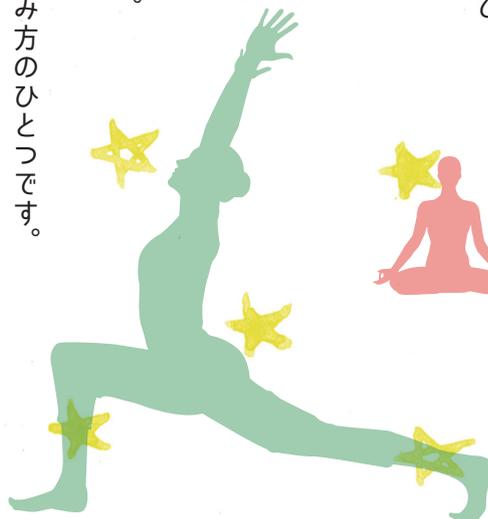
自分が競技に参加しなくても、観戦や応援だって、楽しみ方のひとつです。

得手不得手や勝ち負けがスポーツのすべてではありません。

競技と向き合う人たち同士、喜怒哀楽やさまざまな思いを抱き、  
共感し共有することができます。

スポーツをとおして交流することで、チームメイトもライバルも  
気づけば、支え合いの輪のなかにいます。

スポーツには、住民の張り合いと思いやりを増幅させ、  
地域を健やかにする力があるのかもしれない。





真剣なプレー中も笑顔がこぼれる

# 青空の下、ペタンクがつなく住民の生活と心

◎清水ペタンク愛好会（宮城県女川町）

## ポイント

- 小さなグラウンドが、週3日は顔を合わせる集い場に。
- チーム内外、仮設住宅内外の交流も。

ペタンクは、地面に描いた輪を基点とし、ピュッとと呼ばれる木球をめがけて、鉄球を転がすように投げ合う競技だ。2チームに分かれ、相手よりも自分たちの鉄球をピュッとに近づけることで得点を競う。

ペタンクは、地面に描いた輪を基点とし、ピュッとと呼ばれる木球をめがけて、鉄球を転がすように投げ合う競技だ。2チームに分かれ、相手よりも自分たちの鉄球をピュッとに近づけることで得点を競う。

宮城県女川町の中心部から少し離れた清水地区にある、清水仮設住宅。そのわきに、ペタンク専用のグラウンドがある。毎週、月・水・金曜日の朝9時から11時ころまで、仮設住宅の入居者や近隣住民から構成される「清水ペタンク愛好会」のメンバーが集まり、練習に励んでいる。同愛好会は、女川町内の大会で優勝経験があり、県大会でも上位入賞する、実力派チームだが、普段の練習では、わきあいあいと、ペタンクを楽しんでいる。

## にぎわうグラウンド

「○○ちゃん、当てて〜」「当たれ！ 当たれ！」「よし！ 2点！」「○○さん、上手いなあ〜」誰かが上手なプレーをしたり、試合の形勢が逆転したりすると、その場は、いつそうにぎやかになる。味方チームが打球を失敗したり、相手チームが良い打球をしても、そこにいるのは、同じ地域に住む仲間同士。喜んだり、悔しがったりしながらも、終始、明るく、楽しそうな雰囲気は変わらない。

コート横に設置されたテント内には、椅子とテーブルが備え付けられており、ポット、コーヒーマシン、ビスケットなどの軽食が用意されている。休憩時間には、皆で椅子に腰を下ろして、お茶のみをする。秋には、ストーブを持ってきて、焼き芋をすることもある。

スポーツの合間に、ほっ



## 清水ペタンク愛好会 会長 平塚 仁さん

「練習を休んだ人に、あとで声をかけに行ったり  
するので、見守り合いにもなっているんです」

と一息つきながら、お喋りをして、生活のなかのちよつとした出来ごとや、困りごとなどを共有できる。メンバー同士の交流を深め、絆はグラウンドを離れても変わらない。

大好きな競技が、  
つながりづくりの力に

同愛好会は、清水仮設住宅の入居者のなかで、東日本大震災以前にペタンクをしていた人たちが声をかけ合い、2011年秋に設立された。

業者に頼んで敷地の土をならし、コートの子になるテープは、自分たちで取り付けた。また、テントづくりの際には、用意した木材を地面に打ち込んで骨組みをつくり、ビニールシートをかけた。メンバーは、ペタンクを楽しむだけでなく、会の設立や活動場所の整備などを手掛けたということもあり、愛好会への思いもひとしおだ。

現在の会員は、10数人いて、全員が70歳以上。通院など、それぞれの予



強風対策で屋根を外した、コートわきのテントに集合

定と練習日が重なり、5人程度しか集まらないときもあるが、たいてい10人程度が参加する。

多い時期には20人いたメンバーも、災害公営住宅への入居や、自立再建などで、清水仮設住宅から他地区に移ったことで、会員数は減少している。一方で、仮設住宅から転出したあとも、里帰りするよう足運び、活動を継続している人もいるなど、憩いの場になっている。

メンバー間の良さや、居心地の良さが伺える。

コートですぐ近くには、仮設住宅の集会所やバス停、さらには遊具のある広いスペースがあり、仮設住宅のあちこちから人が集まる。食料品などを取り扱う移動販売の車も停まるため、愛好会が活動しているところ、移動販売車での買いものを済ませる人、散歩のついでに立ち寄る人もいる。愛好

会のメンバーと、メンバーではないご近所さんが、そんなきっかけから、友人関係にも発展する。「ちよつと触らせてください」

「いいよ」

「1回まざってみなよ」

愛好会の様子を見ていた人が、コートに置かれている鉄球を手に取り、投げようとすれば、愛好会のメンバーも、気さくに声をかけ、経験の有無を問わず、輪に入るよう誘う。

同愛好会会長の平塚仁さんは、「練習を欠席した人を心配して、声がけをすることもある。活動が見守り合いにつながっている」と語る。

日頃の練習をとおして、仮設住宅入居者同士のつながりを強めつつ、大会への参加では、対戦相手など、他地区の住民とのつながりも生まれている。スポーツへの意欲が、メンバーの心身のリフレッシュに加え、その周りの人たちを含んだ、支え合いのネットワークづくりへと広がっている。清



声の掛け合いで高まるチーム力

# 多世代がともに汗を流して、気にかけて合う

◎大槌町ソフトバレーボール協会（岩手県大槌町）

ライター：元持幸子

## ポイント

- 小学生から70歳以上まで、多世代で楽しめる。
- 練習の合間は、社交場！互いを気にかけて合うことが、チーム力づくりにつながる。

年をとっても

スポーツで汗を！

ある平日の夜、岩手県大槌町にある旧大槌小学校体育館で、笛の合図とともにソフトバレーのナイターリーグが始まった。町内にある13のソフトバレーボールチーム、約50人が集まり、コートで汗を流す。年代も性別もさまざま。この大会を主催している大槌町ソフトバレーボール協会会長の小笠原悦子さん（60歳）も、現役プレーヤーとして試合を盛り上げる。「一年をとってもスポーツで汗をかき、声を出すことは、とても気持ちがいい。ナイターなどの試合を組み込むことで、さらに参加者のモチベーションが上がって練習にも力が入るんですよ」。大槌町で、ソフトバレーボール（以下、ソフトバレー）の輪を広げてきた小笠原さんは魅力を語る。

町内リーグは総当たり戦で、年代差や男女比の異なるチームが戦うことになるが、50歳代中心の

チームが30歳代チームに勝利するなど、チームの作戦によって勝敗の行方が未知数で面白い。参加していた佐々木敦さん（50歳）は汗を拭きながら、「ソフトバレーは、年を重ねても続けられ、体を動かせるスポーツですね」と話し、次の試合コートへ笑顔で向かっていった。

初心者でも

安全・容易にプレー

ソフトバレーは、「いつでも」「どこでも」「誰でも」「いつまでも」楽しめる生涯スポーツとして、25年前に開発された競技だ。1チーム4人制で、コート面積はバドミントン



スポーツマンシップにのっとった交流



## 大槌町ソフトバレーボール協会 会長 小笠原 悦子さん

「年をとっても若い人たちと一緒に試合ができるのが、ソフトバレーの良いところなのよ」

コートと同じ。ネットの高さが2mと低く、使用するボールも柔らかいので、バレーボールの経験がない初心者でも、安全かつ容易にパスをすることができ。小学生から70歳以上まで多世代が楽しんでおり、チーム構成は、競技を楽しむ「フリーの部」、「ファミリーの部」、年齢別に楽しむ「男女混合」と「女子の部」があり、試合ごとに自由にメンバーを組み合わせて変えることができる。

大槌町では1995年、PTA仲間とのスポーツ交流がきっかけで始まり、手軽にできるスポーツとして徐々に広がった。2010年には町内の46チーム、約200人が参加するリーグを開催し、県内のソフトバレーチームが参加する「南リアス大会」や県大会に出場するチームが出てくるまでに広がった。

翌年、東日本大震災の影響により、多くのスポーツ競技が練習のできない状況におかれたが、県内のソフトバレーチームからの支援が大きな力と



チーム「リベンジ」全国大会への参加

なった。小笠原さんらは、一緒に汗を流した仲間から励ましを受ける一方、被災後の日常の不安や相談を仲間から聞くことも多かった。「いまこそ身体を動かしてストレスを発散させ、心身の体力づくりと仲間づくりが必要」と、ソフトバレーの再開を決断。チームの名簿をつくり直すために、避難してバラバラとなった仲間の連絡先を探した。震災から1年後、南リアス大会を大槌町で再開することができた。

### 練習の間は社交場

小笠原さんの所属する

チーム「リベンジ」は、週2回夜に体育館で活動している。全国大会のレディイスの部門に、2年連続出場した実力派。メンバーは、主婦や社会人など年齢層に幅があり、未経験者も一緒に練習をしている。

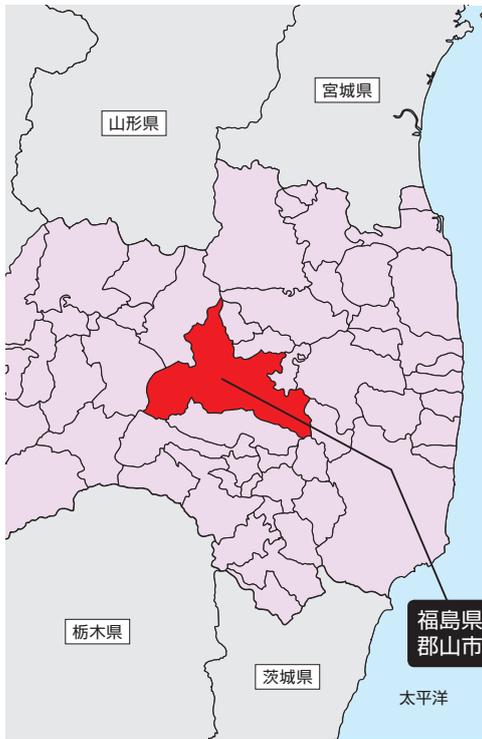
最近、リベンジには他県から仕事で来ている派遣職員の若者がチームに加わった。「年をとっても、若い人たちと一緒に試合ができるのが、ソフトバレーの良いところなのよ」と小笠原さん。チームのメンバー構成を多様に変化させられるルールによって、新メンバーも仲間に取り込みやすい。「体を動かすだけでなく、仲間とおしゃべりも楽しみの一つ。練習に顔を出さないと、どうしているのかと気になるんです」と、メンバーの河原畑洋子さんは話す。練習の間は、家庭や仕事の相談をしたり、さまざまな情報交換ができる社交場と化す。多世代がスポーツをとおして一緒に汗を流すことで、声をかけ合い

### DATA

#### 大槌町ソフトバレーボール協会

〒028-1121 岩手県上閉伊郡大槌町小槌第32地割126  
大槌町教育委員会生涯学習課 大槌町体育協会 / TEL 0193-42-2300  
2000年に設立。老若男女を問わないスポーツとして普及するが、震災の影響を受け、練習や大会を行うことができない時期が続いた。現在は、県内外チームが参加する試合「南リアス大会」を再開。競技人口は、50～60歳代を中心に80人ほどに回復してきている。

ながら互いに状況を察し、自然なチーム力づくりにつながっている。ソフトバレーは、岩手国体のデモンストレーション競技として大槌町を会場に2016年に開かれることになり、さらなる盛り上がりを見せている。地域の元氣と笑顔を育んできた生涯スポーツが、震災後の変化するまちの暮らしを活気づけるのは間違いない。



グラウンド・ゴルフの練習の様子（郡山総合運動場内の広場：8月19日撮影）

## 練習場は会話と笑顔が絶えない「野外のサロン」

五十鈴グラウンド・ゴルフクラブ（福島県郡山市）

### ポイント

● 活動日が多ければ、スポーツクラブも見守りの基盤になり得る。効能は仲間づくり、健康づくりだけじゃない！

80歳代も打つ、走る！

「打ちまーす」

軽やかにゴルフクラブをスイング。打球音が空に響き、色鮮やかなボールが勢いよく地面を転がっていく。

「少し強い」

「方向はいいぞ」

「入るか：惜しい。でもナイスショット！」

仲間から声援と拍手が送られる。福島県郡山市の郡山総合運動場（開成1丁目）でのグラウンド・ゴルフの練習風景だ。

ここで練習しているのは、20年以上の歴史を持つ五十鈴グラウンド・ゴルフクラブの会員。同クラブの会員は57人（10月9日時点）で、富岡町からの原発避難者も9人加入している。練習には、常に30人以上が参加する。

グラウンド・ゴルフは、ゴルフをアレンジした中高齢者向けのニュー・スポーツの一種。愛好者は、全国に300万人以上とされる。競技性は普通のスポーツと変わらない一方、年齢や体力・体格による成績差が生じにくく、子どもから

高齢者まで、男女の別なく一緒に楽しめる。公園や広場など、一定の平場があれば容易にコースを設営できることもあって、1980年代以降急速に普及した。プレーは6〜8人程度が一組となつて、8コースを2回ラウンドする。打つたら走つてボールを追ひ、次の打者の邪魔にならないよう、ボールの代わりにマーカーを置く。打つ、走る、打つを繰り返す。

五十鈴グラウンド・ゴルフクラブの会員には80歳代の人もいるが、プレー中の動作は下の世代と見分けがつかない。

「どうしてそんなに元気かって？ 楽しく運動して



左から五十鈴グラウンド・ゴルフクラブの宗像恒男会長、渡辺末雄顧問、山本美和子事務局長

いるからかしら」と82歳の女性。「はははっ」と明るく笑って答えてくれた。

### ほとんど小さな町内会

同クラブ会長の宗像恒男さん(77歳)は、「プレー自体楽しいものですが、ラウンド中や休憩時に仲間と一緒に和気あいあいと会話できるのもグラウンド・ゴルフの魅力」と語る。会話が弾み、笑い声が絶えない練習場は、まるで屋外のサロンのよう。

練習は、土日祝日と火曜日を除く毎日、午前9時から11時ごろまで。活動日が週4日あるため、実質的に見守りの場にもなる。

事務局長の山本美和子さん(78歳)は、「練習を続けて休んでいる人には、電話をかけて『どうしたの?』と様子を窺うようにしています」と説明する。通常は、クラブの連絡網を通じて、事前に活動を休む旨の申し出がある。「休んでいる人の消息は、だいたいわかります」(山本さん)。

クラブの組織体制は、正副会長、顧問、事務局長、

会計担当などの役員のほか、6人程度の班を9つ設け、それぞれに班長を置く。班は情報伝達の単位となり、練習や大会の情報ももちろん、必要に応じてお互いの消息もやりとりされる。ほとんど「小さな町内会」(宗像さん)だ。

クラブは、単なる競技団体の枠を超え、日中の集い場、仲間づくりの機会となり、支え合いの基盤にもなっている。木

### DATA

#### いすゞ 五十鈴グラウンド・ゴルフクラブ

郡山グラウンド・ゴルフ協会に加盟する会員制クラブ(29団体・約830人)のひとつ。平成4年9月設立で、会員数は57人(10月9日時点)。市内でも有数の規模と歴史の古さを誇る。会員の年齢層は60歳代前半～80歳代後半で、男女比はほぼ半々。郡山総合運動場(開成地区)を練習拠点とする。練習日時は月・水・木・金の午前9時～11時(※運動場施設工事に伴い、今年10月以降は不定期で練習)。冬期(1月～3月)は休止するが、有志10人前後が自主的に練習場を除雪し、活動を続ける。

## 専門家に聞く地域づくりのヒント

### スポーツをとおしてのネットワークづくり



東北大学大学院 歯学研究科 副研究科長

#### 小坂 健(おさか・けん)さん

長野県生まれ。東北大学医学部、東大大学院、国立感染症研究所、ハーバード大客員研究員(タケミフェロー)を経て、厚生労働省保健課課長補佐、厚生科学課がん対策推進本部(兼任)。介護予防の導入に関わり、岩沼市との共同で複合型プログラム開発。平成17年より現職。同研究科副研究科長、同大学災害科学国際研究所災害医学研究部門教授、同大学総長特別補佐(企画担当)兼任。内閣府食品安全委員会専門委員、宮城県みやぎ21健康プラン推進協議会会長、石巻市地域包括ケアアドバイザー、岩沼市では高齢者の暮らしや絆と健康との関係を調査し行政に提言し、地域包括ケアシステムによる災害対応を提唱している。

#### 「大槌町ソフトバレーボール協会」

いつでも、どこでも、誰でも、いつまでも楽しめるスポーツとして25年前に開発されたスポーツとのこと。震災前の2010年には約200人が参加するようになっていたことが、震災後比較的早期に再開できたことの原因だと思われます。大槌町の良いところは、行政も一緒になっていることです。派遣職員の若者がリベンジのためチームに加わったり、岩手国体のデモンストレーション協議として大槌町を会場に開催されるなどの実績となっているのだと思います。

#### 「郡山市五十鈴グラウンド・ゴルフクラブ」

20年以上の歴史のあるグラウンド・ゴルフクラブで、練習にも常時30人以上が参加しているとのこと。ここでは6～8人程度が一組になってラウンドすることから、ラウンド中も和気あいあいと笑いが絶えないようですね。まだ、地域によってコースが近くにあるところは限られているようですが、私が支援している岩沼市でもひとりの町内会長が興味を持ち、15～17人くらいで福島まで時々遠征に出かけています。ぜひ交流をしてもらいたいですね。

今回の3つの事例は、いずれも高齢になっても楽しめるスポーツによって、ネットワークを広げていることが特徴的です。ここで紹介されたスポーツはどれも初心者でも参加しやすく、でもやってみると上達する喜びや、勝負の刺激を味わえる素晴らしいものです。人と人との絆、社会への信頼をソーシャルキャピタルと呼び、健康に大きな影響を与えていることがわかってきています。地域コミュニティのソーシャルキャピタルを高めるために、これらのスポーツが重要なツールとなるでしょう。

地域コミュニティでのネットワークづくりにスポーツは欠かせません。スポーツを通じて、皆で喜びや悔しさを分かち合うことの素晴らしさは、老若男女を問いません。これからスポーツを始めようと思っている方は1人でやるより、仲間ですることを考えましょう。仲間でするほうが長続きすることがわかっています。

加齢に伴う筋量や筋力の減少(サルコペニア)によって要介護状態になるリスクが高まることが指摘されています。国の健康づくりのための身体活動基準では、65歳以上の高齢者では「横になったままや座ったままにならなければどんな動きでもよいので、身体活動を毎日40分行う」ことが望ましいとされています。スポーツを夢中になってしていれば40分くらいはあっという間に過ぎてしまうので、自然にサルコペニアを予防し、介護予防にも大きく貢献すると言えます。

私も学生時代、野球とスピードスケート(国体にも選ばれたこと有り)に明け暮れました。今も週末には地域の野球とソフトボールのチームに参加していますが、あまり痩せないようです。

#### 「清水ベタンク愛好会」

ベタンクという競技はフランスが発祥の競技で、フランスでは600万人の愛好者がいるとのこと。自分のボールを目標となるピユットの近くにいかに投げられるかが勝負となり、一見簡単そうですが、玉が3種類使い分けされるなど奥が深いようです。この愛好会が、震災以前にベタンクをしていた人が声をかけ合い、自然発生的に仲間が増えて、皆が手づくりで準備の作業を行ったこともある愛着のある場所でプレーできるのが素晴らしいですね。



# 県庁所在地として、 震災避難者の生活環境を整備

## 岩手県盛岡市



岩手県  
盛岡市

県庁所在地である盛岡市は、岩手県の中部に位置し、人口は約30万人。東日本大震災では、震度5強の地震により停電や断水が発生したものの大きな被害はなく、沿岸部への物資の提供や職員の派遣を担い、市内64か所の避難所では延べ1万人以上を受け入れた。

岡市へ転入してくる大学生・専門学校生などを対象にした「復興支援学生寮（シェアハウス）」を運営。被災者の生活再建と未来の人材育成をあと押しする。

### 学生や企業を応援

敷金は無料だが、光熱水費は入居者が折半して負担する。日中は、入居者の相談や建物の管理を行う支援員が常駐しており、進路相談などに応じている。現在、定員30人に対して21人が住み、7割が女性だ。先輩からの口コミで入寮する学生が多く、庭の手入れをしたり、畑をつくるなど共同生活を楽しむ姿が見られる。毎年、福祉を含む多様な仕事に就く学生を輩出しており、市総務部危機管理防災課長の藤澤厚志さんは、「社会人になつたあとも人脈がつながる場に」と期待を寄せる。

市ではこのエリアを「もりおか復興推進しえあハート村」と名づけ、復興支援学生寮のほか、デジタルコンテンツ関連企業や復興支援団体のシェアオフィス、コミュニティカフェとして活用している。

### 戸別訪問と「ふるさとバス」

沿岸部から盛岡市へ避難する人たちの受け入れや住宅の確保に努め、2015年10月28日現在、民間賃貸住宅や市営住宅などのみならず、親類宅などに651世帯1300人が暮らす。

市内には大学が4校あり、県内の進学先として学生の受け入れは見逃ごせない課題だ。市が運営する「復興支援学生寮」は、4〜5LDKの戸建て住宅8棟からなり、1戸あたり3〜4人で共同生活を送る。入寮資格として、①東日本大震災による被災者のうち、進学のために盛岡市へ転入する人、②将来、被災地の復興に貢献したいという意思のある人、の2点を満たす必要がある。鍵つきの個室が一人ひとりに用意され、台所・浴室・トイレなどは共用で、食事は各自で準備する。家賃

復興支援学生寮が位置する地区は、もともと独立行政法人都市再生機構（UR）が区画整理事業の際の仮住まいの場として、戸建て住宅を準備したエリア。その役目を終えた時期に震災が発災し、そのまま市がURから25棟の寄付を受けた経緯がある。

盛岡市へ避難してきた人への生活支援も欠かせない。出身県別に見ると、岩手県内が8割強。宮城県が35世帯、福島県が74世帯となっている。年代別では、60歳以上が全体の4割を占め、医療・福祉の充実した県庁所在地を避難先に選んだことがわかる。

あり、4年間で来館者数は6万8000人を超えた。運営を担うのは、市から委託を受けた「一般社団法人SAVE I W A T E」。生活支援相談員が12人配置され、戸別訪問チーム（6人）、視察・送迎・情報収集チーム（3人）、首都圏の企業と被災地をつなぐマッチングチーム（3人）に分かれて活動している。

市内にプレハブ仮設住宅はなく、被災者はみなし仮設に暮らしているため、点在して支援の手が及びにくく孤立しやすい難点がある。そこで、市は避難者の生活支援を担うため、「もりおか復興支援センター」を11年7月に設置した。あわせて、被災後に進学のため盛

政法人都市再生機構（UR）が区画整理事業の際の仮住まいの場として、戸建て住宅を準備したエリア。その役目を終えた時期に震災が発災し、そのまま市がURから25棟の寄付を受けた経緯がある。

市が設置した「もりおか復興支援センター」では、戸別訪問や各種相談の受け付け、生活・復興情報の提供、交流サロンやイベント活動などを行っている。市役所内丸分庁舎の1階に

戸別訪問は、これまでに1万2000回以上行った。相談内容で多いのは、住居、健康、仕事、地域とのつながりに関すること。訪問頻度は、生活課題の軽重に応じて

復興支援センターが入居する盛岡市役所内丸分庁舎

市役所内丸分庁舎の1階に

市役所内丸分庁舎の1階に

市役所内丸分庁舎の1階に



もりおか復興支援センターが入居する盛岡市役所内丸分庁舎

2週間に1回程度、月1回程度、3か月に1回程度、訪問不要の4段階に分けている。アルコール依存症の一人暮らしの男性には、保健所や家族と連携して支援にあたり、また、発達障害のある子どもを抱える母子世帯への就労支援には「盛岡市くらしの相談支援室」と連携してすすめるなど、関係機関へのつなぎや連携をたいせつにしている。副センター長の細田玲さんは、「震災当初から築いてきた相談員との信頼関係を失うことなく、被災者が今後を判断する手助けをしていきたい」と話す。

今年度は約400世帯を重点的に訪問し、近況把握のみならず、みなし仮設世帯の今後の住居の希望や再建方法を確認している。時間の経過とともに、「地元に戻らず、盛岡市で暮らしたい」と考える世帯が増えて67%にのぼるため、帰郷支援だけでなく、盛岡市の公営住宅申請などの情報も提供する。

さらに、交通の足のない高齢避難者のために、地元の復興状況を自分の目で確認するための「ふるさとバス」ツアーを実施。沿岸部を6ブロックに分け、各ブロック

を日帰りで巡る(全6回)。参加者数は思ったより伸びないが、帰郷した際の支援情報を知る機会ともなっている。センターでは、ひきこもりや孤立を防止するためのサロンやサークル活動にも力を入れる。「お茶っこ飲み会」

は、誰でも参加できる「定例」(毎週土曜日)と、出身地別に3ブロックに分けて行う「市町村別」(毎週木曜日)の2種類を開いており、平均で12〜13人の参加がある。ここで出会った参加者が、自

主的に日帰り温泉を企画して出かけるなど、センターの外に飛び出た交流へと広がっている。また、生活再建して沿岸部に帰郷した人が、盛岡に用事に来たついでに立ち寄るなど、「逆里帰り」の場としても機能している。

センターを管轄する市総務部危機管理防災課副主幹の佐藤卓さんは、「時間の経過とともに、生活再建の進み具合に格差が生じている。自立への意欲を高める支援を考えていきたい」と話す。

### 玉山地区での生活支援

一方、盛岡市社会福祉協

議会は、もりおか復興支援センターのスペースで交流会を週1回主催しながら、岩手県社協の事業により11年10月から生活支援相談員を1人配置して、避難者の生活を支援する。

市街地から離れた北部の玉山地区に避難する人たちの相談支援にあたっており、あえてサロン活動はせずに戸別訪問に注力する。

訪問対象世帯は、当初の30世帯から、自主再建による転居に伴って現在は10世帯19人である。そのうち65歳以上は6人おり、3人がグループホームや特別養護老人ホームなどで暮らす。

訪問は週1回行っていたが、近況を把握し信頼関係を築いた現在では月2回に落ち着いた。地元に戻らず生活支援相談員の石川克子さんは、「避難している人たちに地域の子育てサロンやサークルを紹介することで、地域に少しずつ馴染んでいったように思う」と振り返る。避難者を招待するイベントがあれば、足のない参加希望者のために石川さんが送迎を担うなど、気持ちにこたえる支援を心がけ

た結果、いまでは自分が避難してきたという事実を周囲に公にする雰囲気が生まれ、地元の地区民生児童委員協議会が小正月に避難世帯に手づくりの赤飯弁当を届けるなどの活動につながった。「沿岸部の災害公営住宅の建設が遅れているため、このまま盛岡に住むか、それとも戻るかで気持ちが揺れている人が多い。それぞれの思いに寄り添った対応を心がけたい」と石川さんは話す。

震災からもうすぐ5年。行政や医療福祉の関係機関、支援団体などが連携し、岩手県全域の復興をあと押しする。小



もりおか復興支援センター内での「定例お茶っこ飲み会」

#### DATA

##### もりおか復興支援センター

岩手県盛岡市内丸3-46 (盛岡市役所内丸分庁舎)  
月曜休館  
TEL 019-654-3521 FAX 019-654-3524

##### 盛岡市社会福祉協議会 玉山支所

岩手県盛岡市玉山区渋民字泉田 360  
盛岡市玉山総合福祉センター内  
TEL 019-683-2743 FAX 019-669-5122

支え合い

# S-1 グランプリ 第2回 いがす大賞



被災地の優れた支え合い活動を掘り起し、称え、広く発信するS-1グランプリ。第2回大会（2015年2月15日）の応募者、入賞者のアイデアと実践を、連載形式で紹介していく。



農業による雇用創出に取り組む「株式会社小野花匠園」は、今後のさらなる飛躍が期待され、S-1グランプリで「おがる賞」を受賞した。

小野花匠園を設立したのは、現在、代表を務めている小野政道さん。東日本大震災後、大きな被害を受けた南三陸町で、自分に何ができるかと自問を繰り返した。そして、残された農地を利用して、仕事をなくした人たちが働ける場所をつくりたいと考え、農業で雇用を生み出すために、2012年2月に株式会社を立ち上げた。

現在は、社員が8人、さらにパートタイマーが約10人いて、8・9月頃の繁忙期には、20人以上を雇用してい

る。働く場所を失ってしまった高齢者や、震災によって引きこもりがちになってしまった人など、職に困っている人たちの生活を支えるのに一役買っている。震災後に南三陸町に移り住んできた人や、農業に携わった経験のない人のことも歓迎している。小野花匠園のスタッフは、皆「会社というより、まるで家族みたい」と話すほど仲が良い。

スタッフやその家族などのために、安定した収入を確保する必要があり、年間をとおして、生産・加工・販売をすべて自分たちで手掛ける体制を構築した。春や夏はトマトやイチゴ、夏と秋は菊の栽培を行い、冬には菊の花束加工に取り組んでいる。

インターネット販売の仕組みを整え、さらには、南三陸町や周辺地域のコンビニ、スーパーを1軒1軒訪ねて、地道に販路を拡大してきた。いまでは、花やトマトを、気仙沼市や石巻市、仙台市、岩手県の大船渡市や陸前高田市に出荷し、東京都内の市場にも流通させている。

小野花匠園は、S-1グラ

ンプリ当日は来場することができず、事前に用意した紹介用動画が放映された。「南三陸町から全国に農業で勝負するということにワクワクする。今のスタッフと、今後新しく入るスタッフで、どこまでできるかチャレンジしたい」映し出された小野さんが語った。

15年4月からは、「農業体感プログラム」も実施している。菊を用いたフラワーアレンジメントや、トマト、イチゴの収穫を行い、農業を体で感じるができる。「20年、30年後も雇用を生み出し続けたい」という小野さんの熱い思いが、農園や地域を活性化させる。清



畑に入って、子どもも大人も全身で農園を楽しむ

DATA

## 有限会社アグリードなるせ

【本社】〒981-0411  
宮城県東松島市野蒜字神吉5-1  
TEL/FAX 0225-88-3645  
URL <http://agriead.jp/>

【農産物処理加工施設 NOBICO】  
宮城県東松島市野蒜字羽黒50-1  
TEL 0225-86-2535  
FAX 0225-90-3910

27回目

市民リレー

# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

## 農業で元気に！ 農村コミュニティの再生を目指す

◎アグリードなるせ（宮城県東松島市）



農産物処理加工施設 NOBICO で、米やパウチクレーンなどを購入できる

新商品「のびるパウチ」は、ソフトとハードタイプの2種類（各1,200円税込）

約100haの農地で農業を展開している

東松島市野蒜地区は、2011年の震災による津波で水田や畑が甚大な被害を受け、住民の約8割が地区外への転居を余儀なくされた。そのなかで、同年にいち早く農地の除塩作業に取り組み、良質な一等米の生産を実現させたのが、地元の農業生産法人「有限会社アグリードなるせ」（代表取締役・安部俊郎）だ。

地区内での効率的かつ安定的な農業経営を目指して2006年に設立。被災後は離農する農家が多く、その農地がアグリードなるせに集積された。米や小麦、大豆、じゃがいも、白菜などの野菜を栽培・出荷する一方、今年8月には農産物処理加工施設「NOBICO」が完成。六次産業化事業の第一弾として、自家栽培の小麦「シラネコムギ」を使ったパウチクレーン「のびるパウチ」を10月に発売した。取材時も、買い求める来客や注文書の対応に追われていて、新たなご当地土産となり得る勢いを感じた。

地域農業の受け皿であるアグリードなるせでは、雇用の創出だけでなく、コミュニティづくりにも力を注ぐ。震災後に地元行政区に暮らす

人が減少したことを受け、2012年から「福幸祭」を開催。他地域へ引っ越した人もこの日は野蒜に戻って交流を深めており、昨年からは福幸祭はのびる多面的機能自治会とアグリードなるせの主催として開催されるようになった。

さらに、地域生活と農業が一体化している地区ならではの悩みとして、48世帯に対して、行政区や農業系の役職が70以上あったことから、地元の主だった人たちと検討、相談した結果、「のびる多面的機能自治会」を昨年3月に発足させた。会長、農業・行政担当の各副代表、事務局長のほか、防災・教育・福祉などの担当を受け持つ役員12人の計16人体制とし、地域での役割をスリム化。この自治会には住民のみならず、地元の病院や民間団体なども加盟し、アグリードなるせとともに、柔軟な発想で農村コミュニティの再生を目指す。

2年後には高台の集団移転が始まり、自治会のあり方を再検討する時期が来る。「それはそのとき。今を全力疾走」と前を向く常務の佐々木和彦さんの姿が印象に残った。

# お互いさまの関係性

特定非営利活動法人ノーマライゼーションサポートセンターこころりんく東川 副理事長／  
北海道東川町共生サロンこころりん・相談センターこころりん運営者／ソーシャルワーカー 大友愛美

私たちの法人は、共生サロンという現場を持っています。共生サロンは、食堂であり、支援の現場であり、遊び場であり、集いの場でもあります。仕事をしたいけれど自信がない人、家にひとりであるのが寂しい人、暇をもてあましている人などが集まり、何かしらの仕事をしている風景があります。お昼が近づき、誰かがニュースを見るために、テレビのスイッチをオンにすると、そこはもう普通の食堂です。ほかの食堂より幾分、障がいのある人たちが混ざり合う可能性が高いかもしれません。食堂がオーダーストップすると、一瞬静まり、相談や支援の予約を入れた人たちが、ちらほら現れ、放課後になると子どもたちが遊びに来て、その横で特別支援学校に通う人が個別支援の活動で、調理や作業などを行っていることもあります。将来の不安を相談に来た人が、遊

びに来ている学校を休みがちな人の話を聞いてあげていること、もあれば、長いこと家から出ていなかった人に、障がいのある人が何のためらいもなく関わっている姿を目にすることもあります。共生サロンのテーマは、支援する側とされる側が立場の入れ替えをスムーズに行える場であることです。障がいのある人や、その家族は、実は支援されることに疲れきっていることがあります。「これ以上迷惑をかけたくない」「善意でしてくれていることだから、ありがたく受け入れる」などという言葉の裏に、支援されることへの疲れを感じる瞬間があります。知的障がいなどが重く、そのような表現をできない人たちであっても、たくさんの方が善意で声をかけると、逃げていってしまうような人もいます。障がいの特性によっては、あたたかく目の



共生サロンの食堂の様子

端あたりで見守ってもらおうくらいがちょうどいいと感じる人もいます。また、支援されたり、配慮されたりすることで自信を失うこともあります。相手が何を望んでいるのか、これがわかれば気遣いや配慮はうまくいくわけですが、相手が何を望んでいるのかを突き止めるのは本当に難しいことです。福祉の専門職でさえ、相手が何を望んでいるのか突き止めようとするのが仕事の大半なので

すから。障がいのある人やその家族への配慮とは、相手を正しく知ろうとすることからしか、何も始まらないかもしれません。何かをしてあげようと考える前に、相手に何をしてもらっているのかな？ 支えられていることはあるかな？ と振り返ってみるのも素敵な支援です。支援や配慮は一方的であるよりもお互いさまのほうが、より心地よく感じるもののように思います。



おおとも・よしみ=北海道旭川市在住。知的障害者入所施設に勤務後、地域で暮らす障がいのある人とその家族を支援する制度外の事業所を運営。現在は、共生社会の実現を目指すNPO法人を拠点に支援者養成などの仕事をしている。

## DATA

### 東川町共生サロンこころりん

主な業務：高齢・障がい者・子どもの相談支援、居場所活動の提供、連携調整など  
所在地 北海道東川町東町1-7-10  
TEL 0166-82-2666  
URL <http://blogs.yahoo.co.jp/cocorolinkhigasakiwa>



# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 市民後見人の養成【3】

今回は、市民後見人が初めて誕生した事例についてお話ししましょう。

それは、知的障害のある方の申し立てによる後見でした。母親が施設に入所して一人暮らしとなり、今後の生活を支えるため後見人の必要性が問われた事例でした。

サポートする私たちは、市民後見人の役割として、親代わりの寄り添い型の見守り（身上監護）をイメージしていましたので、第一号の案件としてこの事例がふさわしいと考えました。本人との相性を意識して、同性の世話好きなおばちゃん（ゴメン！）に白羽の矢をあてました。

初めてのことで、サポートする私たちとしても、大きな負担を強いるような事例は避けるとともに、市民後見人が社会に広く認知されるためにも、成功事例にしたいというつまらない思惑がありました（市民後見人となる人のスキルは、市民感覚にあふれ、互助的な人権意識を高く求められます）。

ところが、人生には想定しないことがよく起こります。元気だった母親が急死し、相続のことや、財産にかかる管理及び処分の課題が出てきて、支援する側の私たちは慌てました。

ところがこの市民後見人の方は、自ら親族や関係者との間を調整し、家庭裁判所の助言や専門職の助言を受けるなど、専門職後見人顔負けの活動を行われました。市民感覚をもつ後見人として、地域生活者の立ち位置で活動し、「後見人のあり方」を示してくれました。何よりも本人に寄り添い、本人の意思を尊重していく姿勢には、専門職後見人にはない味わいがありました。

私は、この市民後見人と同様の姿勢で、被災者を支援する方々を見てきました。各地のサポートセンターのおばちゃんたちです！ 災害公営住宅への移転期を迎え、地域での支援に必要な存在こそ、皆さんだと実感しています。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上章



### 新たな地で、住民と地域を支援することの不安や戸惑いのなかで…

災害公営住宅などへの転居が進み、支援者も移転先の住民や地域とどうかかわっていけばよいのか？戸惑い、悩んでいる声を聞くことが増えてきました。

仮設住宅での安否確認や相談援助といった、個別支援を主に行ってきた支援者からすれば、戸惑いは当然のことと思います。

新たな地で住民同士のつながりづくりや見守り活動、自主的なお茶会などの立ち上げをどう支援すればよいのか？また、災害公営住宅や周辺地域の自治会や団体とどうかかわっていけばよいのか？など、支援する対象も目指す支援の目標もこれまでと比べて広がり、漠然とした感がして“難しい”と感ずるのが正直なところだと思います。

被災者も新たな移転先で、通常地域生活に移行していきます。被災前に地域住民として普通に暮らしてきたように、より地域の主体者として見ること、尊重することがたいせつになります。支援者はそのことを十分に踏まえ、仮設住宅でのような「直接的な支援」の延長ではない支援のあり方や、住民・地域の活動者を主体とした「間接的な支援」のあり方を考えていく必要があると思います。

だからといって、安否確認や相談援助といった個別の支援が必要でなくなる、というわけでは決してありません。なぜなら、災害公営住宅への入居者は、高齢や単身世帯など何らかのハンディを抱えている世帯も多く、時間が経過すればするほど、その傾向は高まるからです。

いずれにしても、個別支援も含めながら、災害公営住宅と周辺地域が一体となったコミュニティづくりを意識した「地域活動支援」をどうやっていけばよいのか？一緒に考えていきたいと思っています。

### 平成27年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

#### <市町別事例研究会>

【東松島市会場】11月20日(金) 東松島市老人福祉センター  
講師：志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)  
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)  
【巨理町会場】12月3日(木) 巨理町立図書館  
講師：大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)  
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

【七ヶ浜町会場】12月17日(木) 七ヶ浜町生涯学習センター(中央公民館)  
講師：大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)  
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)



仮設住宅入居者世帯支援ネットワーク会議の様子



## 暮らしを支える支援員16

### 仮設住宅と災害公営住宅をつなぐ ネットワーク会議

塩釜市社会福祉協議会（宮城県塩釜市）



塩釜市社会福祉協議会が運営する「塩釜市ふれあいサポートセンター」では、離島を含むプレハブ及びみなし仮設（公営住宅・民間賃貸住宅）を支援する一方、入居が始まった災害公営住宅への訪問活動を行っている。センターの相談員8人が分担して、見守りの必要な高齢者・障害者などへの支援、入居世帯の健康管理、相談に応じている。

市社協では、関係機関とともに、震災の年の11月から「仮設住宅入居者世帯支援ネットワーク会議」を毎月1回開催。被災者支援に関連する市の生活福祉課・長寿社会課・健康福祉課のほか、市内2か所にある地域包括支援センター、地区民生・児童委員協議会などが一堂に会し、情報共有を図る。サポートセンターの相談員からは、前月の訪問活動や入居者の状態について報告がなされ、通院して帰宅後に救急車で搬送された人の今後の見守り体制などが話題となった。地域包括支援センターなど、関係機関との連携が今後も欠かせない状況だ。「仮設住宅には高齢者など見守りの必要な人が多く、気がゆるせない」と常務理事兼事務局長の今野吉晃さんは話す。

9月末現在、市内のプレハブ仮設住宅には90世帯、公営住宅及び民間賃貸住宅のみなし仮設住宅を含めると456世帯が暮らす。高齢化率は約4割。認知症のある一

人暮らしの人を支えるために、ケアマネジャーと相談して介護保険サービスの利用だけでなく、相談員が服薬管理や食事の確認を担い、金銭管理のために後見人をつけるなど、多様な生活支援を行っている。

さらに、錦町地区の集合住宅タイプの災害公営住宅40戸の入居が始まり、すでに入居している伊保石地区の戸建てタイプ31戸をあわせた計71世帯への訪問活動を始めた。錦町地区には、地元のNPOやボランティアグループなどが参画してサロン活動の実施や見守り支援をともにしている。また、離島の浦戸地区には、いち早く戸建てタイプの災害公営住宅が建設され、相談員は訪問活動はもちろんのこと、応急仮設住宅集会所で実施していた周囲の住民を誘って集会所で手芸を楽しむサロンを公営住宅でも実施できないか検討している。地域包括ケアや、介護保険改正に伴う新しい総合事業の展開とあわせて、「被災者」の枠を取り払った地域づくりにつながる地道な取り組みに期待したい。小

**DATA** 塩釜市社会福祉協議会  
〒985-0003 宮城県塩釜市北浜4-6-52  
TEL 022-364-1213 FAX 022-364-6482

#### お知らせ

#### ☆次号予告 特集「地域の自治活動」

#### 平成27年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修事業

##### <仮設住宅等からの移行期における研修 フェーズⅢ>

講師：<sup>なまき</sup> 保憲（淡路市社会福祉協議会 事務局次長）  
山本 信也（宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当課 課長）

【盛岡会場】12月9日（水） アイーナ 岩手県民情報交流センター  
【釜石会場】12月10日（木） 岩手大学 三陸復興推進機構 釜石サテライト

##### <市町村別事例検討会>

【山田町会場】12月14日（月） 山田町保健センター  
講師：大坂 純（仙台白百合女子大学 人間学部 教授）  
池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

#### 平成27年度 福島県・地域支え合い体制づくり事業

##### <被災者生活支援の基礎研修と災害公営住宅への 転居期における研修 基礎編>

講師：永坂 美晴（明石市望海在宅介護支援センター センター長）  
山本 信也（宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当課 課長）

【郡山会場】12月1日（火）・2日（水） 郡山市民文化センター  
【二本松会場】12月15日（火）・16日（水） 福島県男女共生センター

##### <災害公営住宅に移ると、 周辺地域の人たちが、ともに築くまちづくり講座>

【郡山会場】12月1日（火） 郡山市民文化センター  
講師：池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

【二本松会場】12月15日（火） 福島県男女共生センター  
講師：酒井 保（近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター）

#### 購読者を募集しています！

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？

購読会員 年3,696円（年12回、送料込み）

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座  
口座番号：02260-9-46303  
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み  
を記入してください。

備考 2015.11.4 戻し



